

●民話伝承に取り組み

西米良村小川地区には江戸時代中期から明治維新まで約二百年間、歴代の米良領主が居城とした小川城があった。この城跡に県内でも古い歴史を持つ小川小・中学校があったが、一九八九(平成元)年廃校となり、百二十年の歴史に幕を閉じた。

小川民俗資料館は六七(昭和四十二)年、小川小学校に勤務していた前田聰教諭が地区民に呼び掛けて貴重な民具類を集め、空き教室を利用して創設した。その後学校が中心となって収集を続け、七四(同四十九)年、卒業生から寄付を募り、改装した。八九年の廃校で一時間閉鎖となったが、九〇(平成二)年三月、村は石垣の殿様ご隠居所跡を小川城址(し)公園として整備、そこに城をかたどった資料館を移設、完成させた。同時に民話館も造られた。

城址公園は史跡や歴史民俗資料の保存、伝統



小川城址公園。西米良村を語る文化の拠点になっている

文化の伝承を図りながら、地域活性化を進める狙いで整備、現在、昔からの生活用品約三百三十点が展示・保存されている。

村は現在、小川地区全体を「語り部の庄」とし、民話伝承に取り組んでいる。

きっかけは、七四(昭和四十九)年、小川中学校の文化財愛護少年団が民話の収集を始め、翌年三月に二十四編の民話集第一号を完成させたこと。さらにすでに民俗学者・柳田国男氏が、小川に伝わる漆を採る兄弟の話や「米良の上漆」として発表。それを劇作家・木下順二氏が影絵劇「木龍うるし」にし、その話が全国の小学校教科書にも出ていることが中学校教師の話で紹介され、村人はあらためて西米良の素晴らしさを見直したことがある。

村には多くの神話・伝承が残っている。その昔、小川をコノハナサクヤヒメが訪れ、その

田を見てヨネヨシと呼んだ。それが「米良」の地名になったという説話、さらに姫の毛髪をご神体にした米良神社の伝説、米良山の精霊で人懐っこいカリコボーズの話など、いずれも興味深い。

こうした民話を残そうと、村は城址公園の一带を「民話の里」とし、九七(平成九)年から小川地区の十数人が民話館で訪問客に昔話を語り続けてきた。その後、広く村内から若手の語り部を養成。二〇〇二(平成十四)年十月、「西米良村語り部の会」を発足させた。毎年十二月第二土曜日の米良神楽の日には民話館を会場に午後五時から二時間、宮崎県や大分県の語り部も呼んで「民話語りと神楽の夕べ」を開く。

寺原重次